香川の出土遺物から　理兵衛焼（りへえやき）と富田焼（とみだやき）

江戸時代の陶磁器の生産地は肥前（佐賀県・長崎県）や瀬戸・美濃（愛知県・岐阜県）、京都などが有名です。香川県の遺跡から出土する陶磁器もこれらの産地のものが大半を占めますが、県内で生産された陶磁器も少量ながら出土しています。ここでは、理兵衛焼と富田焼について紹介します。

理兵衛焼は、初代高松藩主の松平頼重が京都粟田口から招いた陶工に紀太理兵衛という名を与えて、焼かせた高松藩のお庭焼です。

理兵衛焼の作風は京焼とよく似ており、江戸時代中ごろまでは印銘がないため、京焼とほとんど見分けがつきません。この時期の理兵衛焼は大名間での贈答品、参勤交代の献上品などとして使われていましたが、江戸時代後半になると、大量生産し、「高」の印銘を入れるようになります。

一方、富田焼は香川県の東部、現在のさぬき市大川町付近で製作された陶磁器です。とくに、江戸時代後半に操業した連房式登窯である吉金窯跡（よしかねかまあと）では、磁器の椀・皿、陶器の椀・皿・徳利・香炉・燈明皿・鍋など、さまざまな雑器を焼いていたことが発掘調査でわかりました。

また、この窯跡からは理兵衛焼の印銘が入った未成品も出土しました。紀太家に伝わる由緒書には、５代目弥助惟久（18 世紀中葉～末）が吉金窯跡の近隣の大庄屋蓮井家の出身で、高松藩の藩命で紀太家の養子になったこと、８代目惟晴（19 世紀前半）の時代には富田焼の陶工富永助三郎が窯焼きの助けをしていたことが記されています。このことから、吉金窯の経営には弥助惟久とその実家である蓮井家や高松藩が関係しており、富田焼とともに、理兵衛焼の一部がこの窯でも焼かれていたと考えられます。

御庭焼　大名などによって招かれた陶工が、城内や別荘などの庭園内で焼いた趣味的要素の強い陶磁器。　（森下友子）

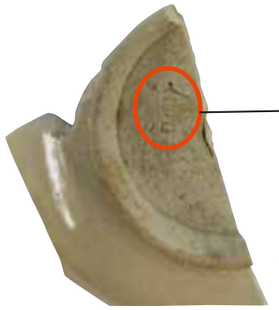
▲理兵衛焼椀（高松城跡西の丸町地区）
左：高松藩大老大久保家家紋
右：葵文　松平家家紋

▲理兵衛焼塔（高松城跡西の丸町地区）

▲理兵衛焼塔（高松城跡西の丸町地区）

▲理兵衛焼塔（栗林公園）

▲富田焼椀（左）・燈明皿（右）（空港跡地遺跡）



◀理兵衛焼椀「高」の印銘
（高松城跡西の丸町地区）

香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
tel. 0877-48-2191　fax.0877-48-3249
https//www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/index.html

いにしえの讃岐　No.114　2023 年 (令和 5 年) 10 月発行

いにしえの讃岐

香川県埋蔵文化財センター情報誌

NO.114

▲ ふるさと学習小中高生のための考古学体験講座（土器作り）の様子

テーマ展「新たな時代のうつわ - 須恵器 -」

会期：令和５年９月25日
～令和６年１月26日
休館日：土・日・祝日

須恵器は、古墳時代中期（５世紀）に朝鮮半島の土器の影響を受けて成立した硬い土器で、それまでの日本にはないロクロや窖窯（あながま）（トンネル状の窯）などの新たな技術を用いて作られます。香川県では、全国的にも珍しい初期の須恵器を焼いた窯が２基も見つかっており、大きな注目を集めてきました。

今回のテーマ展では、県内で確認された古墳時代中期の窯や須恵器の特徴について検討しており、その見どころを紹介していきます。

１. 渡来人の土器

朝鮮半島の土器に陶質土器と韓式系土器があります。陶質土器は硬い土器ですが、韓式系土器は陶質土器の技術で作られた軟質の土器です。このうち、朝鮮半島南部の陶質土器を模倣して須恵器が誕生したと考えられています。

これらは日本でも見つかっており、朝鮮半島南部から移住した人々（渡来人）が持ち込んだか、日本で作ったものと想定されます。

香川県でも出土することから、県内での須恵器生産も渡来人が関わる形で始まったと考えられます。

▲古墳時代中期の日本と朝鮮半島

▲陶質土器ハソウ（村黒遺跡：観音寺市）
古墳時代中期前葉

▲韓式系土器平底鉢（尾崎西遺跡：さぬき市）
古墳時代中期初頭

２. 日本最古の須恵器窯のひとつ～三谷三郎池西岸窯跡～

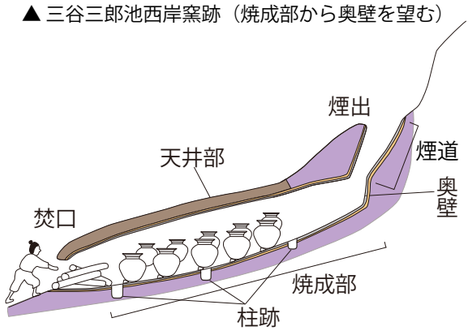
三谷三郎池西岸窯跡は、高松市三谷町の三郎池内にある古墳時代中期初頭（約1,600年前）の窯です。

窯は尾根の先端部を利用してつくられており、中央には天井を構築するために立てた柱の跡があるため、地上で窯をつくる、地上式の窖窯だと考えられます。

ただし、床面の傾斜は15°と緩やかなため、高い火力を出すには、長い煙道が必要です。しかし、地上式の窯では長い煙道を築くのは難しいため、窯の背後の尾根をくり抜いて煙道をつくったと想定されます。つまり、三谷三郎池西岸窯跡は、焚口から焼成部の大部分が地上式で、窯の奥部から煙道にかけてが地下式だった可能性があります。

また、出土した須恵器の大部分が甕です。とくに、甕の底部内面にしぼり痕があるため、伽倻地域からの渡来人が関わる形で須恵器生産が始まったと考えられます。

▲三谷三郎池西岸窯跡（焼成部から奥壁を望む）



▲三谷三郎池西岸窯跡の復元図

▲三谷三郎池西岸窯跡出土須恵器（左：底部内面にしぼり痕をもつ甕、右：甕の口縁部）

●：三豊市教育委員会所蔵
★：さぬき市教育委員会所蔵
■：多度津町立資料館所蔵

３. 大阪？それとも韓国の技術！？～宮山窯跡～

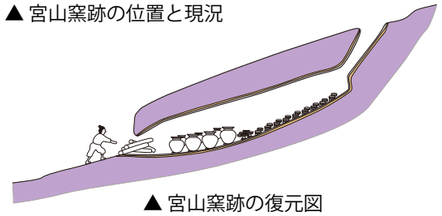
宮山窯跡は三豊市豊中町にある古墳時代中期中葉（約1,550年前）の窯跡で、七宝山から伸びた丘陵の斜面上に築かれています。

窯は、地面をくり抜いて地下につくる地下式の窖窯です。奥壁は垂直に立ち上がった後、傾斜を緩めて煙出に至ります。これは陶邑窯跡群（大阪府）でもみられるタイプです。

出土した須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・甕・壺などがあります。杯などは陶邑窯跡群と共通したものですが、菱形の小さな刺突痕をもつ高杯は伽倻地域の影響が窺えます。

つまり、宮山窯跡は陶邑窯跡群からの技術移転を受けつつも、伽倻地域の技術も用いており、２つの技術が融合した窯だといえます。

▲宮山窯跡の位置と現況


▲宮山窯跡の復元図

◀宮山窯跡出土須恵器●
左：杯蓋（陶邑系）
中央：杯身（陶邑系）
右：菱形刺突痕をもつ高杯（伽倻系）

４. 古墳時代中期の須恵器の特徴

古墳時代中期の須恵器は、初期（古墳時代中期初頭から中葉）と定着期（中期後葉から末葉：約1,530年前～1500年前）で異なる特徴をもちます。

まず、初期には樽形ハソウなどの朝鮮半島に由来する須恵器がみられ、形も陶質土器の影響が残っており、とくに杯身は羽釜のような形をしています。しかし、定着期になると、朝鮮半島系のものはほぼつくられず、杯（蓋・身）も日本独自の形になります。

また、ロクロ技術にも大きな差があり、初期は手で持って器の表面を削り、口の部分は丸く仕上げます。しかし、定着期には、ロクロの回転を利用して、薄手のものをつくり、口の部分をシャープに仕上げ、ロクロを回しながら表面を削るようになります。

器台や壺の装飾も、初期は手書きで鋸歯文や斜格子文を施しますが、定着期にはロクロを回して施す波状文が主流となります。

このように、初期の須恵器は、形や種類、技法などに陶質土器の影響が窺えますが、これらの要素はしだいに取捨選択されていき、定着期には、日本独自のスタイルが確立しました。（谷本峻也）

◀樽形ハソウ（太田下・須川遺跡）
（高松市；古墳時代中期中葉）

▲高杯（陵遺跡：さぬき市）★
古墳時代中期初頭

▲器台（陵遺跡：さぬき市）★
古墳時代中期初頭
鋸歯文＋斜格子文

▲杯身（大浦浜遺跡：坂出市）
古墳時代中期前葉

▲杯身（川上古墳：さぬき市）★
古墳時代中期後葉

■器台（南鴨遺跡：多度津町）▶
古墳時代中期初頭　鋸歯文

▲壺（佐古川・窪田遺跡：丸亀市）
古墳時代中期後葉